



地点で次々とボーリングを行った。豊洲は現在の十勝毎日新聞社の基礎を築き、郷土の産業の進展、文化の振興、スポーツの普及などに大きく寄与した人物である。特に観光開発の必要性を説き、巧みなPR活動によって然別湖や糠平湖など十勝の景勝地が大雪山国立公園に編入された。また、観光宣伝のために自ら歌も作った。「ランランラン トセカネガフル」で有名な『十勝小唄』を芸者に歌わせ、十勝を全国的に宣伝しようとした。この歌は、今でも歌い継がれる数少ない郷土民謡のひとつである。

豊洲は1934（昭和9）年、今の観月苑付近に45度の適温を持つ温泉を掘り当てた。これは今の泉温、泉質と変わらないものであった。この温泉地帯で初めて、加熱せずに使える温泉の湯を使い、和風建築の観月苑を建てた。これに先だって豊洲は当時「雨宮温泉」と呼ばれていたこの温泉を「十勝川温泉」と名づけることを提唱した。

こうして十勝川温泉には笹井、雨宮、十勝川、

地域の新たな取り組み

かつて、北海道各地の河川や湖沼、田んぼでもホテルは普通に見られていた。十勝川地区にもたくさんのお客さんが生息していた。近代化の波により、各地でだんだん生息数が減少し、十勝川地区では1990（平成2）年の夏を最後にホテルの姿を見ることができなくなった。水田の減反や農業の使用などが原因と見られている。

かつては普通に見られていた初夏の光景を呼び戻したい。そんな思いから、2003（平成15）年11月に十勝川温泉では、ホテルの住めるせせらぎを手造りで完成させ、ホテルの幼虫と餌となるカワニナを放流した。

このせせらぎにはモール温泉水が利用され

ている。モール温泉には、カワニナの餌となる珪藻類に欠かせないミネラル分が多く含まれていることから、ホテルは順調に生育し、2004（平成16）年6月末から7月下旬まで毎日ホテルの鑑賞会が開催され、多くの観光客や地元住民の目を楽しませた。

十勝川温泉観光協会やこのプロジェクトを支えるボランティアの方々の思いは熱い。「ホテルを呼び戻すことによって、環境の大切さを多くの人たちが考えていきたい。それと同時に、このモール温泉が大切な資源であることをきちんと私たち自身が再認識し、多くの人たちに知ってもらい、次の世代にも確実に伝える取り組みを進めたい」と語る。

観月の4つの旅館ができ、周辺には料理屋や、雑貨店などが開業し、温泉街が形作られていった。戦後、さらに数件の宿が新しく開業し、現在では、年間130万人以上の観光客が訪れる温泉地となっている。

Data



●お問い合わせ先
十勝川温泉観光協会 Tel. 0155-32-6633
音更町企画課 Tel. 0155-42-2111